



CONTENTS

■シンポジウム	2
オンラインシンポジウム『ジェンダーを巡り変化するメディア』	3
■特別講義・講演会	5
オンライン特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」	6
■学生企画イベント	8
コロナ禍で感じたジェンダーギャップ—大学生は何を感じたか—	9
■研究プロジェクト	12
A「組織におけるダイバーシティ・マネジメント」	13
B「オンラインメディア空間における自己表象によるジェンダーとファッション」	14
●ジェンダーセンター運営委員一覧	16
●ジェンダーセンター運営委員会会議録	17
●編集後記	18

 シンポジウム

オンラインシンポジウム

『ジェンダーを巡り変化するメディア』

【主催】朝日新聞社メディアデザインセンター「かがみよかがみ」編集部
明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】2020年10月24日（土）20:00-22:00（会場 19:50）

【会場】オンラインイベント（Zoom 利用）

【コーディネーター・司会】高馬 京子（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

【視聴者数】約 150 人（常時）

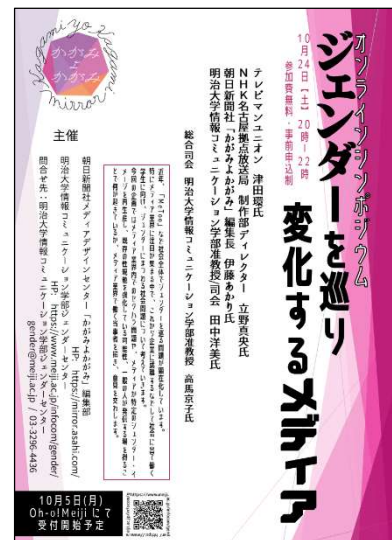
報告：高馬 京子（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

2020年10月24日20時から22時まで、明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターと朝日新聞運営のエッセイ投稿サイト「かがみよかがみ」とが共催で、「ジェンダーを巡り変化するメディア」をテーマにオンラインシンポジウムを開催した。

登壇者は、明治大学准教授田中洋美氏、テレビマンユニオンの津田環氏、NHK「不可避研究中」担当ディレクター立野真央氏、朝日新聞社「かがみよかがみ」編集長伊藤あかり氏、総合司会を本ジェンダーセンター運営委員の高馬京子が務めた。応募時の定員を上回り本学部の学生を中心に150名の学生が参加した。

本シンポジウム開催の狙いは、「MeToo」など、近年、社会全体でジェンダーを巡る問題が顕在化、特にメディア業界に注目が集まったことなどジェンダー問題が顕在化する社会情勢下の中、これから企業に就職するなどして社会に出て働く学生に向け、ジェンダーにまつわる社会問題について考える機会を提供することを目的に開催された。また、ジェンダーとメディア研究の観点からの学術的な意義としても、メディア業界内でのセクハラ問題や、メディアが特定のジェンダー・イメージを再生産し、既存の性規範を強化している可能性、一般の人が発信する場を得ることで何が起きているか、メディア業界で働く当事者を招き、意見を交わすということがあげられる。

登壇者のプロフィールとして、テレビマンユニオン 津田環さんは、AbemaTV「Wの悲





喜劇〜日本一過激なオナナのニュース〜」プロデューサーで、フランスやスペインへの留学経験もあり、#Metoo で自身の体験を告白している。また、NHK「不可避研究中」担当ディレクターは、立野真央さんで、2017年 NHK 入社。「あさイチ」など生活情報番組の制作を担当した後、SNS と放送を横断したスマホ発のジャーナルプロジェクト「不可避研究中」の立ち上げに携わる。朝日新聞社「かがみよかがみ」編集長伊藤あかり氏は 2009 年朝日新聞入社。奈良、徳島で記者、大阪で紙面編集を経験。社内の新規事業創出コンテストに応募し、19 年 8 月にサイトを立ち上げ、編集長となった。

牛尾奈緒美ジェンダーセンター長、伊藤編集長の開催のあいさつ、登壇者の紹介のあと、津田氏が自身が受けたセクハラの実験と、それをどのように告白し、会社がどのように変わりつつあるかについての報告「テレビ業界でのセクハラ告発と対応」、立野氏がジェンダーロールについて街頭で取材して実感した経験、NHK 社内での社内状況の変化に基づいての報告「性役割への違和感を元にした企画発案」、また、伊藤氏が記者や編集者として感じた違和感や、朝日新聞社「かがみよかがみ」立ち上げと運営の中で、変わりつつある社内状況の変化についての報告「20 代女性のリアルな声に接して」、そして本学部の田中洋美氏が「研究者から見たメディア状況の変化」について報告を行い、SNS が普及し、個人が発信しやすくなったことで、情動的なつながりや共感、新たな運動が起きやすくなった反面、怒りによる分断が課題になっていると指摘し、女性に対する性的嫌がらせやフェミニズムへの不十分な理解など、女性にとってデジタル空間が安全な場所になっていない現状を報告した。グループディスカッションを行った。聴衆からの声として、「実際にメディア業界で働いている方の生の声を聴く機会がなかったので、とても貴重なお話だった」「メディア業界でも、まだ性差別の問題が多く残っていることに悲しくなったが、そのような問題を解決しようとする皆様の努力を聞き、感動した。」「メディアに左右され、自分がしたくてそう振舞っているのか分からないということに気が付く企画だった」など参加した学生からもこのイベントへの参加が重要な機会になったという回答が得られた。

「私はメディアが男女の役割を生産していると思っていた。しかし、メディア関係者が少しでも女性の地位を上げようと行動を起こしているのを知れただけでこのイベントに参加した意味があったのではないかと思う。」というアンケートに対する意見もあったように、男女の役割を生産している、規範的ジェンダー表象を構築しているという視点でマスメディアの外側から批判されがちなマスメディアであるが、その内部の中で、その現状を提示し、またそれを改善するためにマスメディアとしての動きを始めている動きをマスコミで働く報告者に報告いただいたことは学生にとっても、そして私たち研究者にとってもいろいろ考えさせられる非常に有意義な機会になったと考える。このような共同企画のきっかけをいただいた朝日新聞かがみよかがみ編集部の伊藤氏、またこの企画を実現するきっかけを準備し、当日コメントを報告して下さった田中洋美氏にお礼を申し上げたい。

 特別講義・講演会

オンライン特別講義

「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2020年12月16日（水）14:00～16:00（開場 13:50）

【会場】 オンライン開催：ZOOM ウェビナー

【登壇者】

安瀨聖司 氏

アクサ・ホールディングス・ジャパン株式会社 代表取締役社長兼 CEO

田代桂子 氏

株式会社大和証券グループ本社 取締役兼執行役副社長

※登壇順

【コーディネーター】 牛尾 奈緒美（明治大学情報コミュニケーション学部教授・
同学部ジェンダーセンター長）

【視聴者数】 約 200 名（常時）

報 告：牛尾 奈緒美（明治大学情報コミュニケーション学部教授）

2020年12月16日（水）14時から16時の時間帯で、オンライン形式による特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」を開催した。本企画は2018年度から毎年、大学主催の『アカデミック・フェス』内で実施されてきたが、2020年度は情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターの主催となり、コロナ禍での新たな試みとしてズームによるウェビナー形式のイベントとなった。当日は学内外から多くの参加者があり、常時視聴者は二百十数名を超えた。

ダイバーシティとは、国籍や人種、性別、性的指向、障がい、年齢などに関する違いのほか、価値観や能力、経験、知識など、さまざまな観点から一人ひとり異なる多様性を指す。本企画はこうした人材多様性の促進を企業の競争力向上の主眼として捉え、ダイバーシティ・マネジメントの先進的取組を行う企業の経営者2名を招聘しご講演をいただき、その後、筆者のファシリテートによるパネルディスカッション、最後に参加者からの意見を集め質疑応答を行うことを目的とした。

講師は前年度に引き続き金融業界から選出し、アクサ・ホールディングス・ジャパン株式会社代表取締役社長兼 CEO の安瀨聖司氏、株式会社大和証券グループ本社取締役兼執行役



副社長の田代桂子氏にご講演いただき、パネルディスカッション、質疑応答にもご対応いただいた。また、両氏のご講演前には牛尾ゼミナール 3 年生の学生が講師のご紹介も兼ねた企業プレゼンテーションを行った。

本特別講義のテーマでもあった「ダイバーシティ」について、女性のキャリア形成、LGBTQs、障がい者支援等、安瀨氏と田代氏から企業トップとしての意識と実践、そして企業としての取り組みの変遷と今後の展望が示され、参加者からは就職活動の上で両氏のような経営者のいる企業に勤めたいとのコメントも寄せられた。参加者からも多くの質問が寄せられ、質疑応答の時間内にすべてに対応することはできなかったが、本特別講義は盛況のうち無事終了することができた。

企業ダイバーシティの考え方のアップデート
 主催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
 協賛：研究部 研究推進課
 実行役：牛尾ゼミナール 3 年生

安瀨聖司氏
 アクサ・ホールディングス・シヤパン株式会社
 代表取締役社長兼 COO

田代桂子氏
 株式会社大和証券グループ本社
 執行役員社長兼海外担当兼 CFO 担当

企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント
 主催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
 協賛：研究部 研究推進課
 実行役：牛尾ゼミナール 3 年生

ダイバーシティとは、人種や性別、性的指向、障がい、年齢などに関する違いのほか、一人ひとり異なる価値観や能力、経験、知識など、いろいろな意味での多様性を指します。

本イベントでは、これらを活かすことで組織を強くするダイバーシティマネジメントに特化した取り組みを企業トップの方をお招きし、お話を伺います。その後、登壇者2名と牛尾教授によるシンポジウムも予定されています。本イベントは、ご参加の皆様からの質疑応答の時間を設けた、双方向型のオンラインイベントです。

目次

- 13:00 開場
- 13:05 開会挨拶
 本学 情報学部長 牛尾 勇樹氏
- 13:10 企業トップのダイバーシティ
 代表取締役社長兼 COO 安瀨 聖司氏
- 13:45 登壇者挨拶 特別ゲスト 田代 桂子氏
- 14:00 質疑応答セッション
- 14:15 シンポジウム 開始
- 15:00 閉会挨拶

日時
 2020年12月15日(火)
 14:00-16:00
 (開場13:50)

講演者 (ZOOM ウェビナー)

- 安瀨 聖司氏 (安瀨 聖)
- 田代 桂子氏 (田代 桂子)

申込は下記リンク先から
 11月11日(水)まで
 申し込みの受付もしくは締切より

URL: <http://www.meiji.ac.jp/1047/52/202011/>

 学生企画イベント



コロナ禍で感じたジェンダーギャップ

—大学生は何を感じたか—

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2020年11月17日(火) 18:30~20:00 (開場 18:20)

【会場】 オンライン開催 (ZOOM 使用)

【主旨】 コロナ禍で改めてジェンダーギャップが表出。化粧の有無や服装について言及されるリモートセクハラ、ステイホーム期間中の配偶者からのDV、10代の望まない妊娠、と様々あります。

では、大学生はどのようなか。朝日新聞社「かがみよかがみ」の伊藤あかり編集長を招き、コロナについて書かれたエッセイを紹介してもらい、同世代がコロナ禍で感じている思いを共有します。

オンラインで集まった明大生同士で、最近強く感じるジェンダーギャップや大学生としてコロナ禍で感じたことについて、ブレイクアウトルーム機能を使い少人数で話し合います。

【来場者数】 6名

報 告：谷口 夏乃 (明治大学文学部4年)

2020年11月17日(火)にZOOMを利用し「コロナ禍で感じたジェンダーギャップ —大学生は何を感じたか—」を開催し、6人が参加した。当初は6月ごろ開催予定だったが新型コロナウイルス禍の影響で開催が約半年ずれ込んだ。また、オンラインの開催に切り替え、学生企画として初の試みとなった。

開催のきっかけは、コロナ禍で気になった二つのニュースだ。一つは以前から聞くことが多かった「ジェンダーギャップ」。非正規雇用で働くシングルマザーの貧困、10代の望まない妊娠など、女性の社会的立場の弱さが顕著に表れたと報じられていた。もう一つは、緊急事態宣言による様々な影響についてだ。リモートワークや小中高一斉休校

学生企画
参加費無料



**コロナ禍で感じたジェンダーギャップ
—大学生は何を感じたか—**

11/17 (火) 18:30~20:00 オンライン開催

朝日新聞社「かがみよかがみ」編集長 伊藤あかり氏

コロナ禍で改めてジェンダーギャップが表出。化粧の有無や服装について言及されるリモートセクハラ、ステイホーム期間中の配偶者からのDV、10代の望まない妊娠、と様々あります。では、大学生はどのようなか。朝日新聞社「かがみよかがみ」の伊藤あかり編集長を招き、コロナについて書かれたエッセイを紹介してもらい、同世代がコロナ禍で感じている思いを共有します。オンラインで集まった明大生同士で、最近強く感じるジェンダーギャップや大学生としてコロナ禍で感じたことについて、ブレイクアウトルーム機能を使い少人数で話し合います。

主催
明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
(<https://www.meiji.ac.jp/info/center/gender/>)

問い合わせ
明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
(gender@meiji.ac.jp)

10/26 (月)
Oh-oi Meijiにて
申込開始予定
(先着 20名)





など、それぞれの年代や職業での影響が取り上げられた一方、大学生についてはあまりニュースで目にはななかった。この2点を、大学生はどう思っているのか聞くねらいで企画した。その上で、本イベントは「ジェンダー関連の話を友達とあまりできない」、「コロナ禍で大変だったことを共有したい」、「世の中の問題についてちゃんと考えたい」など、それぞれのモヤモヤや日常で抱えているものを打ち明けられる場にすることを目指した。

ゲストとして、朝日新聞社が運営するWEBサイト「かがみよかがみ」(<https://mirror.asahi.com/>)編集長の伊藤あかり氏をお招きした。「かがみよかがみ」ではジェンダーやコロナ禍に関して、明治大学の学生と同年代の人々が書いたエッセイを多数掲載している。伊藤編集長はエッセイ一つ一つに目を通しており、違う大学の学生、社会人など様々な経歴の人々の思いを聞くことができると思ったからだ。

目的達成のために事前アンケートを実施した。参加学生が何に興味を持ち参加を試みているのか把握し、当日の運営に役立てた。質問はコロナ禍で困ったこと・大変だったことと、最近気になっているジェンダーギャップについて尋ねた。一つ目に関しては、移動の制限によるコミュニケーション不足についての回答が多かった。二つ目は、性役割など身近な話題から緊急避妊薬や未成年婚などの社会的、文化的な話題まで様々な回答があり、参加学生の熱量に身の引き締まる思いであった。

イベント当日ははじめに開催経緯や趣旨、約束事を全員に共有した。約束事は三つあった。批判しないこと、相手の話をしっかり最後まで聞くこと、秘密厳守で外部に漏らさないこと。約束事を設定し、お互いに安心して話し合える場になった。そして、伊藤編集長からご自身の経歴や運営サイトである「かがみよかがみ」の紹介と続いた。サイト紹介の一環で本イベントと関連性が高いエッセイの紹介もあった。エッセイの内容に共感する部分があったのか、緊張した面持ちだったが頷きながら話を聞く学生もいた。

事前アンケートの結果を参考にして自己紹介もしてもらった。学生たちが、気になっているジェンダーギャップやコロナ禍のエピソードを話してくれた。自己紹介終了後、イベントのメインであるグループディスカッションをした。ZOOMのブレイクアウトルームを利用し、参加学生6人と伊藤編集長、筆者の8人で自由に議論した。「奢り、奢られ問題」や「女性らしさ、男性らしさ」、「脱毛に関する煽り広告」などを話し合った。アンケートの回答に比べると、日常生活で気になっていることへの言及が多いように感じた。同じ大学に通う大学生だが互いを知らないという程良い距離感であったためか、本音を交えた発言もあった。こちらから発言を促したのは最初だけで、途中、発言が被りお互いで譲り合う場面もあった。予定時間の30分を超過するほど盛況となった。最後に伊藤編集長からイベントの総括があり終了した。

反省点は、申込者数に比べて参加者数がかなり少なかったことだ。何人か事前にキャンセルの連絡もあったが、15人参加予定のところ、実際は半分以下だった。オンラインのイベントは、申込のハードルは下がる一方で実際の参加者は減ることがある。どこかに足を運ぶという行動がないため予定が入っているという認識が甘くなり、忘れてしまうのだろうと



推測する。今後も手軽さからオンラインイベントは増えることが予想される。今回の反省点が次につながることを期待したい。

開催にあたり、様々な事務手続きや当日の運営でお世話になったジェンダーセンターの皆様、企画発案段階から長きにわたり見守ってくださった田中先生、高馬先生、お忙しいところご登壇いただいた伊藤編集長、ご相談にのっていただいた「かがみよかがみ」編集部の皆様、当日運営を手伝ってくれた友人、最後に平日夜に時間を割いてご参加くださった学生の皆様に心から感謝申し上げます。

誰かの話や意見を聞いてみる、そしてお互いで考えてみる。そのような小さなやり取りが社会や環境を変えていくきっかけになると信じている。

研究プロジェクト



A 「組織におけるダイバーシティ・マネジメント」

牛尾奈緒美

今年度は、科研費の研究プロジェクト「企業の研究開発におけるジェンダー・ダイバーシティとパフォーマンス」(文部科学省 科学研究費基盤研究(C)(一般)研究代表者 牛尾奈緒美 令和2年度～6年度)に基づき、企業の研究開発部門の業績(同部門が発明する特許の質と量により評価)が、研究チーム内の人材多様性の程度とどのような関係性をもつのか、大量サンプルを用いて多変量解析を行い、いくつかの分析モデルを検出することで仮説検証を行った。組織内のダイバーシティ推進によるイノベーションの創出効果は既存の理論研究においても多数指摘されているところだが、特許に関する当該研究はこれまでになく、本研究の独自性を追求すべく来年度以降も継続的な調査研究を実施する予定である。本年度は、イノベーション・政策研究所(IIPR)主催の「イノベーションと政策研究」ワークショップにおいて、「発明者のジェンダーダイバーシティと特許の質」の口頭発表を行った。

また、毎年筆者が企画とファシリテーターを務め実施してきた大学主催による「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」を今年度はジェンダーセンター主催とし、Zoomによるウェビナー形式で実施した。講師として、アクサ・ホールディングス・ジャパン株式会社代表取締役社長兼 CEO の安淵聖司氏、株式会社大和証券グループ本社取締役兼執行役員副社長の田代桂子氏を招聘し、講演並びにパネルディスカッション、質疑応答にご対応いただいた。女性のキャリア形成、LGBTQs、障がい者支援等、多面的に人材多様性の価値について語られ、ダイバーシティ推進にあたっての問題点や具体的事例、経営者自身のキャリア形成に関する経験談など忌憚のない意見が出され、参加者との質疑応答においても有意義な議論が展開された。トップマネジメントのダイバーシティ推進に対する考え方や、組織全体にその価値観を注入するインクルージョンについて実務に基づく知見を収集でき、今後の研究に生かしていきたいと考えている。



B 「オンラインメディア空間における自己表象による ジェンダーとファッション」

高馬京子

ファッションとジェンダーを研究するスーザン・カイザーは、ファッションとは、様々な境界（階級、国、ジェンダー、年齢、人種など）を超えて「私は誰になろうとするのか」、アイデンティティを構築する装置と述べている（kaiser2012）。ファッションという装置のほかにも、なりたい「私」になるために、ひとは、ダイエット、化粧、整形、性転換手術などを用い、さまざまなメディア等で提言されてきた自らになりたい理想像に近づけるために身体を変容させてもきた。現在、高度情報社会を迎え、インターネット上でのコミュニケーションが促進されている今日、ファッション情報は、それぞれオンライン上で多様に展開されるようになっていく。このようにメディアと時代の変遷とともに、ファッションを身に着けることで「なりたい私」はより実際の自分から遠くへ、より自由にその境界を超えることができるようになった。現在蔓延している COVID-19 によりリアル・ヴァーチャル空間が混在することとなったポストインターネットとしてのデジタルメディア上ではこの傾向はさらに加速されているのではなからうか。今日、このようなデジタルメディア空間で「私」を見せるために、ファッションはどのような役割を担うのか。そのファッションを纏うことでオンライン上でいかなる境界を越え、どんな「私」になろうとしているのか。オンラインメディア上で、社会的規範に囚われることなくより多様な個性的な「私」を自己表象できているのか？それとも、冒頭であげたカイザーの提言した「境界」を超えても、社会的規範ジェンダー像を再強化するにすぎないのであろうか。以上の諸課題を考察するための第一歩として、今日のデジタルメディア空間におけるファッションと自己表象との関係について、2020年度特にこのコロナ禍、新しいファッション情報が発進され、かつそのファッションを身につける実践の場を提供する最先端のファッション・メディアとしての「あつまれ動物の森」を事例に、ファッションを身に付けることでいかなるアイデンティティを形成するのか、について文献、および基礎調査をおこなった。その結果、①ファッション雑誌として、ブランドの広報・広告の場として、また着用者のアバターを用いてのファッションの実践の場としてのオンラインゲームの新しいファッション・メディアとして可能性があるということ②オンラインゲーム上で、プレイヤーがアバターという「身体」を入手することで現実の身体を「放棄」し、「私」がだれかを提示するという、また、その際に、「私」を表すための装置としてファッションという物質面にのみ依拠する傾向が強かったということ、これにより、②アバターを用いることで性別、体形、年齢といった現実の身体に制限されはしないものの、そのアバターの特性に制限されたゲーム内の社会規範を選択し追従せざるを得ず、よりファッションという物質的なもののみ「私」を明示する結果につながることを示唆した。これらを基にさらに研究をすすめたい。一部報告を FASHION STUDIES 主催 Think of Fashion™ オンライントーク #03「ゲーム空間」と「ファッション

ンとアイデンティティ」で行った (Think of Fashion™ オンライントーク #03 | FASHION STUDIES)。



ジェンダーセンター運営委員一覧

○委員長

牛尾 奈緒美

○副委員長

宮本 真也

○学部内運営委員

江下 雅之

施 利平

高馬 京子

山内 勇

○学部外運営委員

高峰 修（政治経済学部）

藤本 由香里（国際日本学部）

○学外運営委員

出口 剛司（東京大学）

細野 はるみ（前ジェンダーセンター長）



ジェンダーセンター運営委員会会議録

第 1 回運営委員会 2020 年 4 月 17 日

第 2 回運営委員会 2020 年 7 月 21 日

第 3 回運営委員会 2021 年 1 月 22 日



ジェンダーセンター年次報告書（2020年度）

- 2021年3月31日発行（PDF）
- 編集・発行 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
- 2020年度年次報告書については、次年度2021年度年次報告書と合冊にて刊行予定です。